

令和7(2025)年度 みよし市中学生平和学習広島派遣団 学習成果報告書



令和7(2025)年7月30日(水)・31日(木)

目次

———— 第1部 はじめに ————

市長あいさつ	．．．．．	P 1
みよし市非核平和都市宣言	．．．．．	P 2
事業概要	．．．．．	P 3

———— 第2部 事業報告 ————

結団式及び事前説明会	．．．．．	P 4 ～ 5
派遣団員名簿	．．．．．	P 6
写真による行動の記録	．．．．．	P 7 ～ 14
参加者研修報告	．．．．．	P 15 ～ 31

第1部 はじめに

市長あいさつ

みよし市は、平成22(2010)年の市制施行を機に、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、戦争の惨禍を二度と繰り返すことのない社会と人類の恒久平和の実現を目指すため、「みよし市平和都市宣言」を制定いたしました。そして、世界でのロシアによるウクライナへの軍事侵攻や核兵器使用の威嚇が行われている状況を憂い、令和4(2022)年9月に、市民の皆様へ核兵器のない世界についてより深く考えていただき、核兵器のない世界に一步でも近づくことができるよう、より強い決意で「みよし市非核平和都市宣言」を行いました。

今年は戦後80年となる節目の年です。戦争を知らない世代が増えている今、私たちが戦争や原爆の体験を次の世代へ語り継ぎ、平和の大切さをどのように伝えていくのか、考えていくかがこの平和を守り、後世へ紡いでいくためにとても重要なことであると考えます。

市内の中学生の皆様を広島に派遣する「みよし市中学生平和学習広島派遣事業」は、戦争の記憶を風化させないための平和に対する取組の一つとして、平成28(2016)年度から開始しました。少しでも多くの参加希望者に参加いただきたいとの思いで、令和5(2023)年度からは、参加人数を各中学校3名ずつの計12名から、各中学校4名ずつの計16名に増員し、実施いたしました。派遣事業は、生徒たちが被爆地である広島に立ち、原爆の被害に関する資料を自分の目で見て、被爆者自身の体験を直接聞くことで、平和の大切さや命の尊さ、家族の絆を考えてもらう大変貴重な機会となっています。

この報告書には、市内4中学校の代表として派遣された16名の生徒たちが、恒久平和の実現に向け、次代を担う世代として、これからの将来に向けて取り組んでいかななくてはならないと感じた「平和へのメッセージ」が綴られています。そして、派遣で生徒たちが感じた思いを、より多くの皆様に共有していただくために、この報告書を作成しました。報告書を読んでいただいた皆様の、いま一度平和について考えていただくきっかけになれば幸いです。

結びに、この派遣事業にご協力をいただいた学校関係者をはじめ、多くの皆様にお礼を申し上げ、ごあいさついたします。

令和7(2025)年12月

みよし市長 小 山 祐

みよし市非核平和都市宣言

核兵器のない世界と恒久平和は、私たち人類共通の願いです。

わが国は核兵器による攻撃を受けた唯一の国家であり、私たちは、非核三原則を掲げ、核兵器廃絶を全世界に訴え続けていかなければなりません。核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて、考え、語り、戦争で犠牲になった方々の想いと共に後世へ引き継いでいくことは私たちの使命です。

戦争から年月が経過し、核兵器と戦争を現実として体験された方が年々減る中、核兵器と戦争の記憶を風化させ、惨禍を二度と繰り返すことがあってはなりません。

みよし市は、日本国憲法に基づいて、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、強い決意で、核兵器のない世界と恒久平和を実現するため「非核平和都市」を宣言します。

令和4(2022)年9月29日

愛知県みよし市

事業概要

1 事業名

令和7(2025)年度みよし市中学生平和学習広島派遣事業

2 目的

- (1) 核兵器のない世界と人類の恒久平和の実現を目指す「非核平和都市」であることを宣言した本市として、「平和に関する事業」に取り組む。
- (2) 中学生が、実際に広島を訪問し、原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学や被爆者による講話を通して、戦争の悲惨さ、平和の意義について考えてもらう機会を提供し、命の大切さや家族との絆等についての認識を高める。

3 内容

- ・原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学
- ・被爆者による被爆体験講話の受講

4 派遣期間

令和7(2025)年7月30日(水)から令和7(2025)年7月31日(木)
まで〔1泊2日〕

5 派遣人員

- (1) 団長＝みよし市総務部次長
 - (2) 生徒＝市内中学生 16名（各中学校4名）
 - (3) 引率＝学校教育課主幹 1名、保険健康課保険師長 1名、
生涯学習推進課主事 1名
- 計20名

第2部 事業報告

結団式及び事前説明会

《日にち》 令和7(2025)年7月12日(土)

《場 所》 市役所3階研修室

1 結団式

- (1) 認定書交付
- (2) あいさつ
- (3) 団長あいさつ及び団員紹介
 - ア 団長あいさつ
 - イ 自己紹介
- (4) 写真撮影

認定書交付



広島派遣に応募した理由、
派遣で学びたいことを自己
紹介とともに発表しました。



- 2 事前説明会
 - (1) 事業説明
 - ア 派遣事業全般について
 - イ 研修報告について
 - (2) 質疑応答



3 レクリエーション（絵しりとり）



団員同士の親交を
深めました！

派遣団員名簿

○ 生徒合計16名

学校名	団員名	学年
三好中		1
		2
		2
		2
北 中		1
		1
		2
		2
南 中		1
		1
		2
		2
三好丘中		1
		2
		3
		3

○ 団長

区 分	氏 名
総務部次長	

○ 引率者3名

区 分	氏 名
学校教育課主幹	
保険健康課保健師長	
生涯学習推進課主事	

○ 応募者数

学校名	合 計
三好中	13
北 中	4
南 中	10
三好丘中	10
合 計	37

応募者総数／派遣者数＝37／16（2.3倍）

写真による行動の記録

<出発式>

広島に向けて出発する前に、派遣中は自分が学びたいことを考えて行動し有意義な派遣にすること、派遣団としてみよし市の中学生の代表である自覚をもって行動することを確認しました。また、熱中症対策など、健康面に関する注意も行いました。



決意表明！



広島へ出発！

<宮島>

広島に到着後、派遣団員の親睦を深めるため、フェリーで宮島に渡り、厳島神社を参拝しました。案内の方の説明を聞き、文化遺産に触れることで、歴史・文化を大切にする気持ちを高めました。宮島のシンボルである大鳥居は壮大な装いを見せてくれました。その光景は、歴史・文化を守る大切さを感じさせてくれました。また、厳島神社の天神社には、学問の神様である菅原道真が祀られているため、冬に受験を控えた3年生を中心に、手を合わせました。



<学習・宿>

宿での食事の号令の際には、自分が感じたこと、広島派遣への思いなどを自分の言葉で団員のみんなに伝えました。

食事を済ませた後、実際に原爆が爆発した地点である爆心地に向かい理解を深め、グループワークに臨みました。自分がどうして広島派遣に応募したのか、事前に調べてきたこと、平和記念資料館で特に学びたいことについて考えを共有し、2日目に備えました。

人により感じることは様々で、自分と違う考えに触れ、新たな視点で平和について考えることができました。



<原爆ドーム・平和記念公園>

ガイドボランティアの方に平和記念公園内の慰霊碑について解説をしてもらい、原爆が落とされた背景や当時の様子などの詳しい話を聞くことで理解を深めました。「原爆ドーム」や「レストハウス」などの建造物を見学し、戦争の悲惨さ、原爆の被害の大きさ、その後の広島の復興について考える機会となりました。



<広島平和記念資料館>

平和記念公園の散策後、広島平和記念資料館を見学しました。原爆の被害を受けた人々の写真や遺品などの展示物や当時の写真などの記録を目にすることで、原爆がもたらす被害の大きさや、原爆は、戦争後も人々を長年苦しめるものであることを感じ、家族や友人と過ごすことができる現在の平和がいかに大切なものかを考えることができました。



<被爆体験講話>

広島平和記念資料館会議室で、実際に被爆を体験された山本定男さんから、当時の状況を示す資料とともにお話を伺いました。

被爆した時の状況は、山本さんは中学2年生であった14歳の時、爆心地から約2km離れた東練兵場で、畑の草取り作業のため集合していたときに被爆したというものでした。被爆前の広島の状況、山本さん自身や同じ学校に通う生徒、ご家族に起きたこと、戦争と核兵器の怖さや広島被害の状況など、様々なお話を聞き、平和の大切さをより深く考える機会となりました。



山本さん自身の
経験や広島で起きた
戦争の現実をお話し
いただきました。

被爆者の講話を
通して平和の大切さ
を改めて考えること
となりました。



<帰着式>

広島の光景を見て感じたこと、今後も平和を続けていくために自分たちにできることについて、代表生徒1名が報告しました。今回の派遣で知った戦争や原爆のこと、直接聞くことができた被爆者の方の思い、この派遣を通して自身で感じた平和の大切さを、派遣団員自らが家族や友人、周りの人々に伝えていくことを確認しました。

2日間の広島派遣で、今ある平和は当たり前のもではなく、多くの戦争の犠牲者があり、復興の努力の上に今の平和な生活があることを実感する機会になりました。



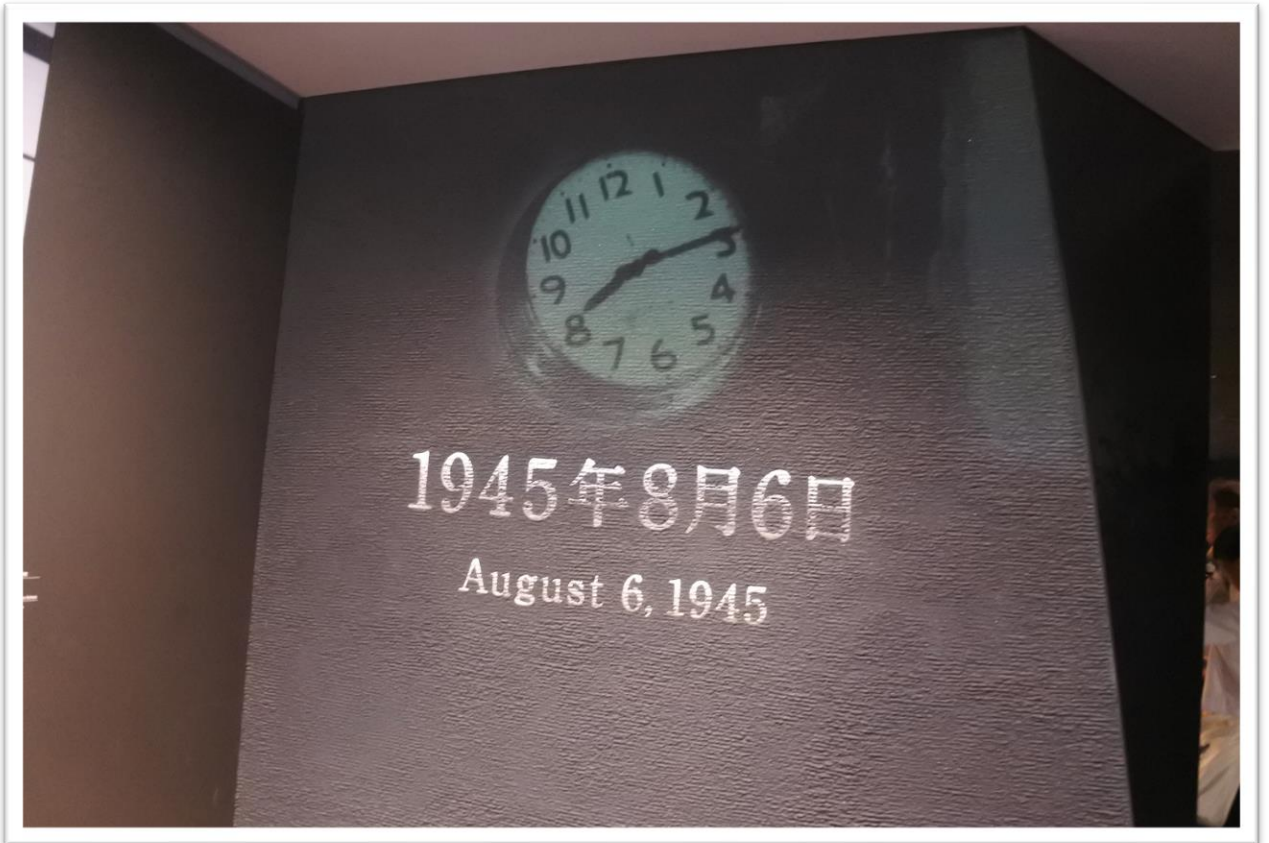
<平和を紡ぐつどい>

令和7(2025)年9月13日(土)に開催された「平和を紡ぐつどい」に派遣団として参加し、献花、派遣団全員での「みよし市非核平和都市宣言」の読み上げ、派遣団員2名の「中学生平和学習広島派遣報告」を行いました。

その後、被爆ピアノを使った演奏を聴き、会場内の「平和を紡ぐパネル展」を見学しました。



派遣団員研修報告



私は、みよし市中学生平和学習広島派遣団の一員として、7月30日（水）と31日（木）に広島県に行ってきました。派遣テーマは、「原爆の仕組みを知る事」と「原爆での被害について学び、自分の考えを深める」にしました。

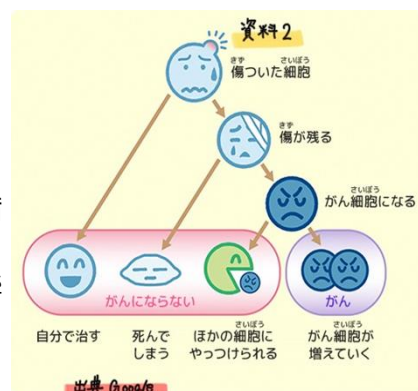
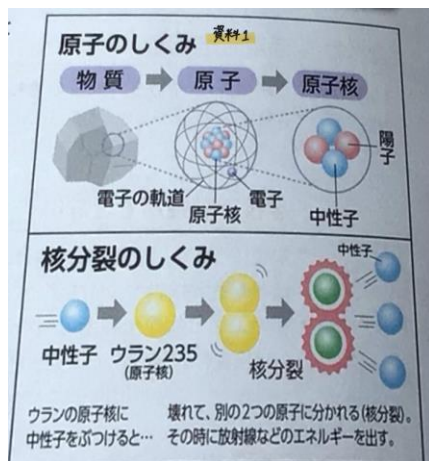
まず、原子爆弾は原子と言う目では見えないとても小さな粒があり、その原子の中心には中性子という粒と陽子と言う粒が結びついてできた原子核があります。ウランの原子核と言う原子番号92のウラン元素の中心にある陽子と中性子から構成される部分に外から人工的に中性子をぶつけると原子核（ウラン235）は分裂し、この事を核分裂と言います。

ウラン235は核分裂を起こしやすい性質を持つため原子爆弾に使われました。核分裂が起こると放射線と言う目に見えない粒子や電磁波が飛び回っている状態などのエネルギーが発生します（資料1）。この核分裂がごく短い間に連続して起こると、一瞬で非常に大きなエネルギーが発生します。この現象を兵器に利用したのが、原子爆弾です。原子爆弾のエネルギーの中には、膨大な熱と放射線、爆風を発生させるものがあります。このエネルギーは、化学反応である爆薬の爆発とは異なり、原子核レベルで発生するため、桁違いの破壊力を持っていることが分かりました。

原爆で亡くなった方々は大火災などでの火傷や、爆風により吹き飛ばされるだけでなく、致死量に至る放射線を浴びて亡くなった方も沢山いたことが分かりました。さらに、原爆の被害は被爆時だけではない事も分かりました。それは、火傷してしまった所が腫れ上がり、痛みを伴うケロイドや、急性放射線障害と言う、放射線を大量に浴びてしまった事で、その後白血病やがんなどの後遺症で亡くなる方も大勢いたということです。

放射線は細胞の遺伝子を傷つけます。少量であれば人体に影響は出ませんが、大量に浴びてしまうと傷の修復が追いつかず、細胞が分裂できず、死んでしまったりがんになったりする事が分かりました（資料2）。

原子爆弾は、ただの化学反応で起こる爆発とは違い、原子核レベルで起こる爆発のため、ただの火災を引き起こすだけでなく、放射線と言う大量に浴びると人間の細胞が傷つけられ白血病やがんなどの後遺症も引き起こします。被爆当時は生きていたことができたけれども、5、6年後に起こり得る原爆病に恐れていたこと、放射線以外にも、火傷してしまった事でその部分が腫れ上がり辛い痛みを受けた人もいたこと事が平和記念公園をガイドしていただいた方や平和記念資料館の見学を通して分かりました。たった1つ広島に投下された原子爆弾は「人々の心と体を一生傷つける恐ろしいものだ」と改めてこの広島派遣で学ぶことができました。戦後80年の今、実際に原爆の被害にあった人が年々減ってきており、来年には、もう被爆体験した人がいなくなってしまうかもしれません。実際に体験した人たちがいなくなってしまうと、もう二度と同じ過ちを繰り返さないように、たくさんの人々に伝えていきたいです。私は「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核悲願の象徴の炎がいつか消せる日が訪れることを願います。



広島派遣に参加して感じたこと

三好中学校 2年

僕が今回この広島派遣に参加した理由は、最近テレビなどで頻繁に放送している海外の戦争の映像や、「ロシアが核を使うかもしれない」という見出しのニュースを見て、実際に原爆が落ちた広島で、原爆がもたらす被害や影響など、詳しく知りたいと思ったからです。

今から80年前の、1945年8月6日、午前8時15分。地上約600メートルの地点で広島でピカッと光ると同時に、3000℃から4000℃の熱線が瞬時に降り注ぎました。ガイドさんから当時の事を教えてもらいながら、半球型の屋根が特徴的な原爆ドームを見ました。僕は、ボロボロになった原爆ドームを見て、原爆の威力の強さに驚きました。

平和記念公園の中には、それぞれの意味を持つ記念碑などがきれいに並べてありました。僕が一番衝撃を受けたのが、身元不明者の七万人もの遺骨が納められている原爆供養塔です。誰かも分からなくなるほどの威力を持った爆弾が実際に80年前に降り注いできた真実を直に感じて、すごく恐怖を感じました。そして他には、テレビなどで見るトンネル型の特徴的な原爆死没者慰霊碑を見学しました。そこは、ほかの記念碑などとは違い、優しい感じで守られているような色やデザインになっているように感じました。この慰霊碑は、世界最初の原子爆弾によって壊滅した広島市を、平和都市として再建することを願って設立したそうです。現在、原爆死没者慰霊碑の中の石室には、34万9,246人の原爆死没者名簿が奉納されており、新たに亡くなったり、亡くなったことが確認されたりした被爆者の名前が毎年書き加えられ、8月6日に行われる平和記念式典で原爆死没者慰霊碑に納められるそうです。僕は30秒ほど手を合わせ参拝し、これから二度と戦争が起こらないように祈りました。

今回の派遣では、平和記念資料館の見学もありました。エントランスは綺麗な感じの大きい部屋で、原爆の悲惨な雰囲気はさほどありませんでした。しかし、本館へ入場すると、昔にタイムスリップしたような雰囲気と共に、80年前の広島街並みが、壁全体に張り巡らされていました。そこには、被爆前と被爆後の写真が照らし合わされており、より原爆の悲惨さが分かるようになっていました。そして、奥に進んで行くと、全体的に暗い部屋になっていき、絵や被爆した物など普通では見られないような物などが展示されていました。そこには、被爆者の方の遺品などがたくさん展示されており、遺品は使用していた方の年齢も様々で、特に同年代の方や、小さい子どもの遺品を見たときは心が締め付けられました。しかし、このような遺品を自分の目で見ることで、原爆のことを知り、戦争の悲惨さを考える機会になったと思います。平和記念資料館の最後には、ノートが置いてあり、いろいろな人たちの寄せ書きが書いてありました。英語や中国語、韓国語などいろいろな言語の文字が書いてあって、外国の方々も平和を祈ってこの平和記念公園に訪れていることが分かりました。

僕は、この広島派遣で戦争の怖さを学ぶことが出来ました。これからも平和な世界を築いていけるように、今回学んだことを次の世代の方々に伝えて、自分には何ができるか考えて行動していきたいと思いました。

僕がみよし市中学生平和学習広島派遣団に参加して学んだことは2つあります。1つ目は、原子爆弾の恐ろしさです。

- ・広島に落ちた原爆は「核分裂の連鎖反応を利用した非常に強力な爆弾」であること。
- ・ウランやプルトニウムなどの原子核が分裂する際に、放出される膨大なエネルギーを爆発力として利用すること。
- ・この爆発は熱線（赤外線）、爆風、放射線といった破壊的な現象を引き起こし、甚大な被害をもたらすこと。

これを聞いてもよく分からない方もいると思うので、簡単に説明します。広島に投下された原爆は通常の1トン爆弾約12500発分です。1トン爆弾だけでも、範囲40メートルを破壊することができます。この時点で既に恐ろしいのですが、さらに恐ろしいのはここからです。広島に投下された原爆は高度約600メートルで爆発しました。この高度で爆発したことによって、爆心地周辺の地表面の温度は3000～4000度に達しました。ちなみに鉄は1500度で溶けます。爆心地周辺の人々約7万人は即死しました。かろうじて即死しなかったが、大火傷をおった人々は何をしたと思いますか？そう、冷たいものを求めたのです。ちょうど近くに元案川という川があり、我先にと大勢の重傷者が川に飛び込みました。ですが、飛び込んだときの元案川は普通の水ではなく、塩水だったのです。大火傷の影響で皮膚がただれ落ちていたのに、そこに塩がついてしまいました。痛いなんてものではすみません。せっかく生き残ったのに、ショック死してしまったのです。当時の川は水面が見えないほど、死体が浮かんでいたそうです。このことから、死の川とも呼ばれています。他にも、放射線物質が入った黒い雨で救助に来た兵士、生き残った人々も大勢命を落としました。「ピカー！バーン！」と共に約7万人もの人々が亡くなり、このほとんどの人が自分のお墓は立てられませんでした。理由は顔も名前も性別も分からないからです。その後、川や黒い雨で約7万人もの人々が亡くなりました。合計約14万人もの人々が亡くなり、当時広島にいた方の約半分がいなくなりました。これが原爆です。これが広島と長崎に落ちた原子爆弾です。

2つ目は、平和の尊さです。原子爆弾が落とされた時、近くに本川小学校という学校がありました。ここに通っていた生徒たちは今の僕たちと同様、毎日学校に通い、勉強して、運動しての毎日でした。いくら戦時中だったとしても、友達と会う時間などは平和なひとときだったと思います。ですが、1945年8月6日、グラウンドに出ていた生徒が、空に大きな物体があることに気づきました。もちろん生徒達はそれが原子爆弾とは思いません、
「わー！すごーい！」とはしゃいでいたそうです。ですが、爆発と同時に教員10名、生徒400名の尊い命が一瞬で亡くなったのです。「もし三好中学校だったら・・・。」そう想像するだけで背筋が凍ります。すべてが楽しい訳ではないかもしれない、嫌なことがあるかもしれないけど、今の平和な三好中学校を、友達をもっと大切にしていきたいなと思いました。

僕はみよし市中学生平和学習広島派遣団に参加して、原爆や広島の過去の知識だけではなく、一人の日本に住む人間として絶対に成長できたと断言ができます。本当に自分にとって貴重な体験をすることができました。今回の派遣を通して学んだことを次は世界に矢印を向けて発信できたらいいなと思っています。そして、話を聞いて興味をもった方、心に響いた方がいたらインターネットなどで、もっと調べて広島派遣団と一緒に「平和の大切さ」を広めていきましょう。

私は、みよし市中学生平和学習広島派遣に参加することが決まるまでは、戦争や原爆、平和について知る機会も、教えてもらうこともほとんどなく、広島のパネル資料館などを訪れることも考えたことがありませんでした。

今から80年前の8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。今の学生や大人の多くは、「戦争があったこと」、「多くの方が亡くなったこと」は歴史の授業で学び、知っていると思います。しかし、原子爆弾による被害や、その影響で亡くなった方々のことまで深く知っている人は少ないのではないかと感じました。

平和記念資料館を見学した際、原子爆弾が落ちる前に「原子爆弾を落とす」という内容のチラシが撒かれていたことを知りました。しかし、それを知った人は誰にも伝えず、自分のところにしまっていたと書かれていました。その人が誰かにチラシを見せていたら、その事実が広まり、被害者は少なくなったのではないかと考えさせられました。

私が平和記念資料館で特に印象に残ったのは、福屋新館という建物から撮影されたパノラマ写真です。被爆後の広島は、原爆ドームと山以外ほとんど何も残っておらず、周囲は焼け野原になっていました。現在では、そのような場所はどこにもありませんが、原爆ドームが残っているからこそ、その悲惨さを実感できました。また、実際に被爆した山本定男さんから原爆が投下された日のことについてお話を伺うことができました。80年前、山本さんは私と同じ中学2年生だったそうです。当時は空襲が当たり前の時代で、「B29がきた」と聞いてみんな「ぼかーん」と空を見上げていたということでした。その後、原子爆弾が投下されました。爆発の瞬間、周囲は炎ではなく、白い光に包まれたそうです。原子爆弾が落ちると、爆心地から4.8kmの範囲が大きな被害を受け、地上の温度は約3000～4000度にもなったと聞きました。その熱で火傷を負い、即死した方も多くいました。さらに、当時は助かったように見えても、10年後、それ以降に白血病やがんなどで苦しみ、亡くなる方も大勢いたそうです。原子爆弾が投下されてから2～4か月で、6～16万人が亡くなったとも言われていることを聞くことができました。

今後、このような戦争は二度と起こしてはなりません。そのためにも、私たちはこの経験を活かし、伝え続けていく必要があります。被爆者の方々はすでに10万人を切っているそうです。だからこそ、被爆者から聞いた貴重なお話を次の世代へつなぎ、平和を語り継ぐ一人になりたいと思いました。

天皇陛下がおっしゃったように、「戦中、戦後の苦難を語り継ぐ」ことはとても大切です。過去は戻ってはきません。だからこそ過去の映像や資料を見て、知ることが必要です。

この世界から「戦争」がなくなり、誰もが過去の戦争を知り、二度と同じことが起きないことを心から願います。

私は広島派遣団に参加して、原子爆弾の威力や破壊力が、他の爆弾とは比べものにならないくらい恐ろしいものであるということを知りました。そして、実際に被害にあわれた方の話を聞いて、原子爆弾をこの世からなくして、平和な世界を実現したいという想いを、みんなに伝えたいと強く思いました。

原子爆弾について、私はその名前を聞いたことはありましたが、どのようなものかはよく知りませんでした。簡単に説明すると、短時間に連続して核分裂を起こすことにより、一瞬にして非常に大きなエネルギーを発生させ、その現象を兵器に利用したものが原子爆弾です。爆発後、爆心地周辺の地表面の温度は3000度から4000度にまで達したそうです。鉄が溶ける温度が1500度ということを考えると、人間なんてひとたまりもありません。爆心地の近くにいたほとんどの人達が、即死か数日後に亡くなりました。また、約3.5キロメートル離れていても(北中からアイモール三好までが約3.7キロメートル)、素肌の部分は火傷を負ったそうです。

なぜアメリカはこんなにも恐ろしい爆弾を投下したのでしょうか。なぜ投下場所に広島が選ばれたのでしょうか。アメリカは、長引く戦争を終結させるための手段のひとつとして、原爆を使用したそうです。そして、原爆投下により戦争を終結することができれば、膨大な経費を使った原爆開発を国内向けに正当化できると考えたそうです。一方で、原爆の投下には威力を測定するという研究目的もあったそうです。そのため、当時、東京や大阪などの都市は焼夷弾による空襲で大きな被害を受けていましたが、広島はそのような攻撃はありませんでした。戦争を早く終わらせるため、原子爆弾の威力を検証するためとはいえ、何十万人もの人々が命を落したり、今もなお、後遺症に苦しんでいたりすることを考えると、複雑な思いがします。

今回の広島派遣で最も印象的だったことは、被爆体験者の山本定男さんやガイドさんの話です。多くの子どもたちが大火傷を負い、川に飛び込んで、ある子は満潮で海水が川に入り込んでいたため、ショック死してしまい、ある子は溺れ死んだり、川の流れて流されてしまったりしたそうです。また、B-29が飛んできたのを、「何事だろう」とポカーンとした様子で見っていた次の瞬間、爆風で、皆、吹き飛ばされてしまったと話していました。私はその一瞬の違いに衝撃を受けました。

山本さんが被爆されたのは14歳、中学2年生の時です。私の年齢とあまり変わりません。もし、私がその時代を生きていたら、山本さんの様に生き延びることができたかどうか、自信がありません。

山本さんは講話の中で、何度も「幸運にも」や「幸いにも」と言っていました。「幸運にも街中での作業ではなく、街はずれでの畑作業になった」、「幸いにも服を着ていた」。「運」という一文字で人の生死が分かれてしまうなんて、やるせない気持ちになりました。だったら、「早く戦争が終わってれば」、「その日の天気が悪ければ」と思わずにはいられません。

今年は戦後80年。被爆した人達は90歳前後になっています。既に亡くなってしまった人や、高齢で活動が難しくなってきた人が多くなっています。10年後には、山本さんの様なしっかり被爆の記憶がある人は、この世にはいなくなっているかもしれません。それを考えると、今回の広島派遣は大変貴重な経験になったと思います。私たちは、まだ子どもなので、やれることは限られていますが、家族や友達に被爆者の想いを伝え、これから先もずっと、平和な世界を実現するためにできることは何かを考えていきたいです。

僕が広島の前爆について興味を持ったのは、小学6年生のときに「ぼくは満員電車で前爆を浴びた」という本を読んだことがきっかけでした。中学生になった今、もう一度広島を訪れることで、さらに深い気づきが得られるのではないかと思います、今回の広島派遣に参加しました。今回、広島派遣で実際に広島へ行き、平和記念資料館を見学し、平和の大切さを改めて知ることができたと考えています。

今回の派遣で僕が伝えたいことは、4つあります。

1つ目は前爆の悲惨さです。平和記念資料館では、僕と同じくらいの年の子どもたちの遺品がたくさん展示されていました。どれも熱で溶けてボロボロになっていて、見ていて胸が痛くなりました。普通の生活をしていた人たちが、一瞬で地獄のような体験をすることになった現実は、衝撃的で、悲しくて、やりきれない気持ちになりました。「なぜ彼らがこんな目にあわなければならなかったのか」と、正直不思議にさえ思いました。

2つ目は被爆体験講話です。被爆者の山本さんのお話を聞きました。山本さんは当時中学2年生で、爆心地から2キロの場所で畑仕事をしていたときに被爆しました。現在94歳で、被爆一世です。山本さんは「広島は地獄のようだった」と語り、8200人いた生徒のうち、生き残ったのは約1900人だったそうです。4分の1弱しか生き残れなかったという事実は、想像を絶します。戦後80年が経ち、被爆者の方々は少なくなっています。山本さんは「前爆の悲惨さを、家族や友達、クラスメイトに伝えてください」と語りました。僕はその言葉を聞いて、本当にその通りだと思いました。僕たちが受け取った話を、次の世代へつなげていくことが大切だと感じました。

3つ目は平和の鐘です。平和記念公園の中にある「平和の鐘」は、1964年に建立されました。鐘の表面には、国境のない世界を象徴する世界地図の浮き彫りがあります。お寺の鐘には仏教的な意味合いの凹凸がありますが、平和の鐘にはそれがありません。どんな宗教にも縛られない、誰でも鳴らせる鐘だからです。僕も実際に鐘を鳴らして、平和を祈りました。日本人でも外国人でも、言葉が違ってても、年齢や性別が違ってても、みんなが同じように平和を願って鐘を鳴らす姿を見て、とても素晴らしいことだと感じました。

4つ目は千羽鶴と禎子さんです。佐々木禎子さんは、前爆の影響で白血病になり、12歳で亡くなりました。彼女は亡くなる直前まで鶴を折り続けました。千羽折ると願いが叶うと信じていたからです。禎子さんの願いは、広島の前興と自分の病気が治ることでした。

その姿に心を打たれた人々によって、千羽鶴は平和を願う象徴として広まりました。平和記念公園には「前爆の子の像」が建てられていて、禎子さんがモデルになっています。僕は、歳がほぼ変わらない禎子さんの願いや行動に尊敬するしかありませんでした。今回の広島派遣では、たくさんの貴重な体験をすることができました。違う中学校の仲間たちと交流できたことも、良い思い出です。前爆の悲惨さ、平和の大切さ、そしてその地獄の中でも消えなかった人々の願いを、僕はこれからも考え続け、周りの人に伝えていきたいと思います。そして、平和のバトンを次の世代へつなげていくことを誓います。

平和の世界を作るために ～広島派遣団に参加して～

北中学校 2年

今回、僕がこの広島派遣に応募した理由は、元々社会の歴史が好きだったからです。いろいろな歴史のことについて詳しく知りたいと思っていました。そのような中、広島派遣の応募を知り、広島に実際に行き、実際に被害を受けた場所を見に行ったり実際に被害を受けた人の話が聞けたりできると聞き、第二次世界大戦時の広島での出来事について詳しく知ることができると思いました。また、戦争から80年が経ち実際に被害を受けた人の貴重な話が聞けることは、今後の自分にとって貴重な経験ができると考え、広島派遣に応募しました。

7月31日、原爆ドームに初めて行きました。はじめに思ったことは、原爆が落ちた所から近いのにこんな状態でなぜ残ることができたのかということです。でもガイドさんの話を聞くと原爆が落ちた所から窓などが無い所だけがなくなっており、窓などの風通りが良い方は残っていて、原爆の爆風で壁はなくなり窓などがあったところは、窓から爆風が抜けて行き、壁などと違い壊れなかったと聞き、自分の疑問がなくなりました。その後平和公園に行きました。鐘や慰霊碑があり、慰霊碑の中にはまだ親族の迎えが来ていない人がたくさんいると聞きました。最近の科学の進歩により不可能と言われていた骨から親族を見つけることができ、親族の迎えが来たという話も聞きました。戦争が終わってから80年、長い年月をかけても未だに原爆の影響が残っていることを感じたと同時に、もっと科学の進歩によってできることが増えてほしいとも思いました。最後は平和祈念資料館に行きました。そこでは実際に起きたことを絵や写真などを使って展示していました。また、最新の技術を使い、実際に起きたことをCGとミニマップを使い原爆の悲惨な光景を再現していました。写真の中には、死んだ人の最後の言葉まで残っており、その中でも自分の中で心に残ったのは、自分と同じくらいの中学生在が「敵機が来て自分は死を覚悟していた」と言っていたことです。こんな状態を作るほどの激しい戦争なんだと思い、自分は悲しみで心がいっぱいになりました。それ以外にも自分より幼い子ども達も覚悟を決めるしかない状況が多くあったことに本当に苦しく悲しくなりました。平和記念館の見学の最後には、被爆者の話を聞きました。本当に被害を受けた人からの話とその時の状況を詳しく聞くことができました。自分の1つ年下の子達がみんな死んでいったという話を聞き、その時の気持ちを考えるだけで胸がいっぱいになりました。それ以外にも被爆を受けた後の話では、被爆の影響で死んだ人たちの死体が町のそこら辺に並んでいたという話を聞きました。

今回の広島派遣では、実際に起きた話、写真や資料などを見て戦争の悲惨さや今の時間が大切であることに気付かされました。このことを自分はこれからの人生でいろいろな人にも話していきたいと思いました。また、戦争について学ぶとき、その悲惨さ故に悲しい気持ちになるのはもちろんですが、自分はそれだけでなく、戦争で悲惨な状況にあった過去を乗り越えて今の広島があることも学びました。「明るいダークツーリズム」というのがあることを報道で知りました。広島は現在、世界でも有数の観光都市です。広島の観光名所で広島の良いところを知り、これまでの過程には戦争で起きたことも伝えていくことで、もっと多くの人に平和について考えるきっかけを与えることができると思います。自分が大人になったら、次世代に伝えるためにもやっていくべきことだと思います。

私は、これまで戦争全般について深く知ろうとしてきませんでした。関心の前に、恐怖心が強かったからです。

しかし、今回みよし市中学生平和学習広島派遣団の募集を知った時、今年は戦後80年という節目の年であることや被爆者の方から目の前で話を聞ける機会は残り数年であることを知り、このまま怖いからという理由で知らずに過ごしては良くないのではないか、実際に自分の目で事実を知ることが大切なのではないかと考えました。

派遣に際し、自らのテーマを「平和について学び、1日を大切に生きる」としました。

今、私は日々自由に生活し、友人と遊び、自分の将来を選択する自由もあります。しかし、時代が違えばそうでは無かったことを考えると、当時の人々の事実や思いを知り、今まで以上に毎日の時間を大切にしていける気持ちが必要であると思い、このテーマにしました。

派遣1日目の夜、原子爆弾が投下されたとされる爆心地へ行き、爆心地と原爆ドームの近さに強く衝撃を受けました。

2日目、座間味正彦さんからお話を聞きました。座間味さんから聞いた話の1つ1つが、全て現実に起きた事とは考えられない内容で、驚いてばかりでした。

- ・ 宿泊地のすぐ近くにある相生橋が原爆を落とす目標になったこと。
- ・ 爆心地の600mもの高い上空で爆発したのに、威力がとても大きかったこと。
- ・ 本川小学校のグラウンドにいた生徒や先生400人が即死したこと。

聞きながら、目の前の光景と当時の様子を想像すると、今まで経験したことがない不思議な感覚で胸がキュッと縮むようでした。

次にお話して下さった山本定男さんは、被ばく当時、私と同じ中学2年生と聞き、小学生も中学生も戦争に関わる仕事をさせられていたのかと驚きました。

山本さんからは、原爆を落とす地域を選んでいく経緯や、山本さんが実際に見た地獄のような光景について詳しく教えてもらえました。道端に真っ黒になった人が死んでいたり、マンガ等で見たものが現実に起こっていたりしたこと、こんなに非常な原爆が、世界に今なお12000発以上も保有されていることが強く心に残りました。

話を聞いた後に入った平和記念資料館では、一瞬で広島のかなたの街並みと人々を壊した再現展示や、見た事もない形に変形した瓶や三輪車やお弁当箱、顔に大やけどを負った人の写真や絵など、思わず目を逸らしたくなりそうになりましたが、知っておくべきことだと強く感じました。

また、被ばくの後遺症に苦しむ様子を記す展示もありました。投下直後は生き延びてもその後、放射能の影響で死の斑点が出たり、髪の毛が抜けたりする人も非常に多くいたと知りました。

貴重な経験を経て、私が今後大切にしたいことは、座間味さんが話して下さった「きえない灯、けす灯」です。

- ・ きえない灯＝みんなが笑顔で平和に過ごせる世界を築けるように考える事をやめないこと。
- ・ けす灯＝核兵器や争いの火種。

貴重な時間を私たちに費やしてくれた座間味さんと山本さん、そして、原爆によって未来を奪われた多くの人々の思いを背負い、原爆を知らない私たちが「繋ぐ人」となって、1日1日を大切に生き、これから伝え続けていこうと思います。

広島では毎朝8時15分に鐘が鳴ります。これは、原爆が落ちたことを忘れないように、毎朝鳴っているそうです。ちょうど原爆ドームのすぐ側でこの鐘の音を聞きました。その音を聞いた時、私は原爆が広島に落ちたということだけでなく、今から80年前に原子爆弾が投下されその瞬間に、たくさんの命や幸せが消えたこと。当時の広島の人たちの何気ない日常が消えたことを考えました。そして、その時代に生きていた方々の思いをしっかりと次の世代に繋いでいかなければいけないということを改めて感じました。

原爆ドームを見ました。壁や丸い屋根などがボロボロになっていて、地面には当時のままと思われるレンガがたくさん落ちていました。それでもレンガ一つ一つ綺麗に残っていて、広島の方々が丁寧に保管していると思いました。原爆ドームは、世界遺産のため、今の姿のまま保存することが重要だそうです。そのため、国の内外からの多数の人々の寄金により、保存修復工事をしているそうです。原爆ドームを見ると生きるための可能性をとて感じることができました。平和を求めるシンボルとしてこれからも、大切に保存していかなければならないと感じました。他にも、平和記念公園には、『原爆の子』の像があり、その周りにはたくさんの折り鶴が飾られていました。この像の中には鐘があり、その鐘の中には大きな折り鶴がありました。その像のモデルとなった佐々木禎子さんは、二歳で被爆。被爆から十年後の1955年2月に白血病と診断されました。そして2月18日、お父さんは医者から「長くて一年の命。すぐ入院が必要。」と宣言されました。鶴を折り始めて一ヶ月足らずの8月末までに禎子さんの鶴は千羽に達しました。それ以降も禎子さんは病気を治したいという願いを込めて鶴を折り続けました。祈りは届かず、10月25日の朝、家族が見守る中12歳でなくなりました。コツコツと折った一羽一羽に『生きたい』という気持ちが込められていると感じました。将来、「体育の先生になりたい」と未来に夢をもっていたのに・・・、私が「あと一年の命」と言われたら全ての希望を捨てて、今すぐにでも死にたいと思うかもしれません。でも禎子さんにとっての鶴は、最後まで折り続け、「生き続けたかった」という思いが込められていると強く感じました。

次に実際に被爆された山本さんからの話を聞きました。山本さんは爆心地から2.5キロメートル離れた東練兵場という場所で被爆されました。その日は雲一つないような青空だったそうです。飛行機が逃げていくと思って空を見上げていたら、ゴォーという音と一緒に爆発したそうです。その瞬間にみんなが吹き飛ばされ、大きく燃え上がっていたそうです。当時建物疎開作業で動員されていた生徒は、合計39校、出勤8,187人、引率176人であり、この方達は、爆心地からとても近い場所で被爆され、そのうち6,295人、引率132人という大勢の方々が亡くなっています。作業をしていた方には何の罪もありません。この方々だけでなく、原爆によって亡くなった方々や火傷を負った方々は、この原爆により消えた幸せや、明るい未来を取り戻すことはできません。この夏休み中、お盆に父の地元へ帰省しました。毎年お参りしていますが、改めてご先祖様の写真を見て、ご先祖様とともに戦艦大和に乗っていた方の存在を強く感じました。私たちは広島や長崎で起こったこと、戦争について一人一人が考えていくことで、今後の平和を守ることがどれだけ大切かということをとくさんの人に伝えていくことが、今も、これからもやるべきことだと分かりました。自分がこの先出来ることをしっかりと考え、行動し、戦争のない平和な世界を作るために今回見てきたこと、感じたことを伝え、平和な世界へバトンを繋ぐ一人として、自分にできることをしていきたいです。

私はみよし市中学生平和学習広島派遣団に参加していろいろなことを学びました。

平和記念資料館では、核兵器の恐ろしさやどうやって作られているかなどが分かりやすく書かれていたり、展示されていたりして新しい発見でした。

新しい発見がたくさんありましたが、私が一番印象に残っていることは、被爆者の方のお話を聞いた時でした。

その被爆者の方の話の中に「原爆が投下されたものの、助かった人の中にも放射線をあびてしまって白血病になって亡くなってしまった人や後遺症がのこってしまう人などが多く、戦後も生活が苦しかった。」という話がありました。今までの自分は、原子爆弾で街が破壊され、火災などでたくさんの方が亡くなっていたと言うことしか頭になかったのもので、その話を聞き、びっくりしました。私は、原爆が落とされた時の被害など以外の話を実際に体験した方から話を聞くことで、多くのことに初めて気付くことができました。

原爆ドームと平和記念公園の見学では、ガイドの方がそこにある記念碑などについて一つ一つ教えていただき、自分の考えを深めることができました。話を聞いている中で疑問に思ったことがあります。

それは、「原子爆弾のように約4000度の熱がこもった爆弾が爆発した時、人間の皮膚がはがれて、人々は近くの川に飛び込んだり、水を飲んだりして亡くなる人も大勢いました。」と言っていたことです。私は、なぜ水を飲んだり、飛び込んだりするだけで亡くなってしまうのか、水につかったり、飲んだりした方が楽じゃないのかと思い調べました。すると「川に飛び込んだり、水を飲んだり、与えたりしてはいけない理由は、逆に体調を悪化させ、ショック状態に至りやすくさせてしまうため」ということが分かりました。その理由が分かった時、重度の火傷をおった人はすごく苦しいし、がまんできないほど痛かっただろうと私は想像すると、とてもいたたまれない気持ちになりました。

私は広島派遣を通して、この今の世界は「核兵器0」では無いということを改めて考えさせられました。私たちが生きている間には、核兵器を絶対になくし、「戦争」と言うものがすごく恐ろしく、怖いことであり、二度と繰り返さない、しないことを世界で約束できるようにしたいと思いました。また、戦争時に犠牲になった人がいるからこそ、今の私たちがいると思います。だからこそ、今の自分の命を大切にしたいとも思いました。

今年は戦後80年になります。戦争を体験していても記憶が無かったり、もうお亡くなりになっている人たちがいたりするため、体験した人、被爆者の人のお話を聞けるのは、貴重なことになっています。被爆経験のお話を聞いた私たちが、次の世代に伝え、これからも日本でこのようなことがあったことを忘れて欲しくないと感じました。

私は、広島派遣団に参加して、当時の状況や実際に目の前で見る原爆ドームを見て事前学習以上にたくさんことを学べてとても勉強になりました。

特に印象に残っているのが中島地区です。現在の島内科医院で、爆心地と説明が書かれたパネルを見ながら実際に話を聞いたところ、

この原爆ドーム周辺、当時は中島地区という地域だったそうです。1945年8月6日午前8時15分にアメリカ軍のB29爆撃機エノラ・ゲイが原爆を投下しました。現在の島内科医院の約600m上空で爆発したそうです。中島地区周辺は、真っ赤な炎に包まれ一面が焼け野原になりました。建物もほぼ焼かれ、唯一残ったのが、今ある原爆ドームだけでした。この建物は当時、広島県産業推奨館でチェコの建築家ヤン・レツルの設計監督により1915年4月に完成し、特徴ある緑色のドームのよって市民に親しまれていました。

また、原爆の怖さを全世界に伝える事と世界平和へのシンボルとして1996年12月にユネスコ世界遺産に登録されました。8月6日の原爆が投下された日以外にも広島には4月27日、7月25日、8月2日の3回、アメリカからの爆撃を受けていて、アメリカ軍の第一目標8月6日に広島、8月9日に長崎に原爆が投下されました。その6日後の8月15日に第二次世界大戦が終了し、日本は終戦を迎えました。

写真にある折り鶴タワーと千羽鶴は、当時爆心地から1.6km離れた楠木町で被爆し、家は一瞬に倒壊しましたが、奇跡的に無傷だった佐々木貞子さんが作ったものです。被爆から9年後、白血病という病に倒れ、入院中折り鶴を千羽折ると願いが叶うと聞いて、薬の包み紙で鶴を折り続けました。しかし、8ヶ月の闘病生活でわずか12歳という短い生涯を終えました。

その後原爆で亡くなった全ての子供の霊を慰めるための像を作り、原爆の子の像建立運動が始まり2年半後の1958年5月5日各地から寄せられた募金によって「原爆の子の像」の除幕式が行われました。そして今でも、原爆の子の像には平和を願って多くの千羽鶴が捧げられています。80年前のあの日は、一瞬にして幸せな日常が破壊され多くの人々の命を奪いました。

この広島派遣を通して、現在被爆された方々が80～90歳と高齢者になり、現在おこなっている当時の話を聞く語り部の活動が難しくなっている事を改めて実感しました。

私は、テーマを「次世代に繋ぐバトン」としました。私が出来ることは、原子爆弾や核兵器をインターネットや本でさまざまな情報を得てまずは正しい知識が必要だと分かりました。また、たった1発の原子爆弾の怖さを世界中に知ってもらい、二度とこのような悲しい思いを未来の子ども達や世界の誰にもさせない事、そしてこれからの世界が平和であってほしいと心から祈っています。このことが、私が「次世代に繋ぐバトン」です。



私はみよし市中学生平和学習広島派遣団に参加して、2つのことを考えました。

1つ目は「幸せ」の考え方です。私は「幸せ」とは好きなことをしている時など、特別な時に沸く感情だと思っていました。けれどそれは、平和記念資料館に行って変わりました。それは平和記念資料館で見た、お母さんから咲予さんに宛てた手紙でした。

「皆にかわいがっていただけるようなよい子になってください。もう泣き虫じゃないでしょうね。かわいい咲予ちゃん、母より、さよなら」この手紙の中の、「かわいがっていただける」と「もう泣き虫じゃない」という言葉が響きました。お母さんの咲予さんには元気に生きてみんなに愛されて欲しいという思いと、お母さんを亡くした咲予さんに対してこれからも前向きに頑張りたいと背中を押すお母さんの愛情と優しさがこの手紙にはつまっていると私は思いました。手紙を見て愛情は何にも変えられない大きな力があると思いました。手紙に込められたお母さんの想いは咲予さんの人生できっと心の支えになっていたと私は思います。でもどんなに幸せな暮らしだとしても心と体も被爆前と同じ幸せは返ってこないと思うと、家族の存在は大きいことを手紙から学びました。この手紙から「幸せ」というのは「誰かに愛されること」だと思いました。何事もなく生活することはもちろんですが、愛されて育ててもらわなければ生きていくことはできなくて、家族がいる、ご飯が食べられる、好きなことができる、友達と遊べる、普段していることは全部普通ではなく、愛されているからできている幸せな生活であることを知りました。これからはもっと感謝の気持ちをもって、それをかみしめながら過ごしていきたいと思いました。

2つ目は酒井さんが言っていた「なぜやってはいけないことをするのか」という疑問です。原爆を落とすというのは、何事もなく日常生活を送っていた人が、突然家族や友達などたくさんの大切なものを失い、多くの人が心に傷を負うだけであり、メリットなど一つも無いと私は思います。そして、いくら相手に非があっても悪いのはした側で、やってはいけないことなんてみんな心のどこかでは分かっていると思うのになぜやってしまうのかそれが私も同じく疑問に思いました。

考えた結果、自分の国が一番になりたい欲が抑えきれないからだとは私は思いました。自分たちが争いに勝ちたくても相手が反抗してくるからわからせてやる、お前は俺より弱いとその時に任せて武力や権力を使い、やっていいこととだめなことの区別がつかなくなってやってしまうと考えました。それでも巻き込まれるのは、何もしていない人で「感情的になったから」では絶対許されないことだと被爆された方のお話を聞いて改めてそう思いました。当時のことを覚えている方のお話を聞いたのはとても貴重な体験だったと思います。お話を聞いて一番感じたのは、感情のこもり方です。話されている時の表情は力強くでもどこか悲しい声をしていました。そんな思いをした人の話を直接聞いて、「こんなことは二度と繰り返してはならない」と思いました。そして、原爆を落とせば多くの人が亡くなってしまう、心に傷を負う人がいるなんてわかりきっているはずなのに争い続ける人の気持ちを私は死ぬまで理解できないと思いました。

このように私たちが日常生活を送れているのは過去があるからであり、今日日本が平和だからできる幸せな暮らしだということを多くの人に知って感じて欲しいです。そして二度と同じことが起こらない世界になるきっかけに自分になれるように一人の語り手として多くの人、未来に繋いでいきたいです。

僕が今回広島派遣に参加した理由は、毎年8月になると、テレビで戦争や原爆について放送されているけれど、あまり実感が湧かなくて実際はどういうものだったのか知りたかったからです。

今回、実際に広島派遣に参加してみて原爆の恐ろしさや悲惨さについてたくさん学ぶことができ、平和の大切さと二度と戦争を起こしてはいけない、絶対に原爆を使うことがあってはならないと強く思いました。

実際に原爆ドームを見て、あの大きな建物がたった一発の爆弾で破壊されたこと、周囲が瓦礫だらけになったことからその威力の大きさを感ずることができました。とてつもない爆風と熱線によって、一瞬で多くの方が亡くなったそうですが、命があった人も全身の火傷と痛みから逃げるために川に飛び込んでショック死した人がたくさんいたとガイドの座間味さんから聞き、恐ろしさと想像できないくらい悲惨な状況にとっても辛い気持ちになりました。

広島平和記念資料館では、原爆によって亡くなった人々の遺品や写真、手紙などが展示されていました。小さな子どもが持っていた焼け焦げた弁当箱、最期の言葉が書かれた日記、そして残された家族の証言。どれもが胸を締めつけるような重さを持っていて、その場で涙が出そうになりました。「戦争は二度と起こしてはいけない」と心から思い、どうしたら戦争が起きないようになるのか考えるようになりました。

しかし、世界中で一万発以上の核兵器が保有されているそうです。でも、世界で唯一の被爆国である日本は、核兵器を「持たず、作らず、持ち込ませず」という非核三原則を掲げています。これは、とても良い決断だと僕は思います。世界に核廃絶を訴え、核のない世界を目指していく日本と一緒にみんなで核をなくしていきたいと思います。

今回、被爆された山本さんのお話を聞く貴重な機会をいただきました。山本さんは中学校2年生の時に被爆されたそうです。山本さんは、思い出したくもないような過去の話語ってくださいました。そのなかでも特に、印象的だったのは、当時僕と同じ中学生も国のために働いていて、空襲による火災の延焼を防ぐために、建物を取り壊す「建物疎開」で家を失ってしまう人が相次いだことです。この話を聞き、自分だったら無力感に襲われてショックで何もできなくなってしまうと思うけれど、山本さんは、みんなを元気づけて平和に繋げていこうと「碑」という曲を自ら指揮して、被爆された方々にこの曲を届けて、元気を与えているそうです。

僕も山本さんのように自分も悲しい思いをしていますが、ポジティブに考えてより悲しい思いをしている人に元気を届けられるような人になりたいと思いました。

今は、被爆者の方が原爆の悲惨さについて語ってくださっています。しかし、10年、20年後もそうとは限りません。だからこそ話を聞かせてもらった自分が平和について考え、周りの人へ戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えていきたいです。

世界にはまだ戦争や争いがあります。日本は海に囲まれています。海の領海を巡って、他国を牽制しているそうです。将来、戦争にならないように、お互いに争うことがないように、僕は世界のたくさんの国、地域のことを知り、いろいろな国の人と友達になろうと思っています。これは、広島から戻ったあと、どうしたら平和な世界になるのか考え、僕が読んだ本の中に「友達がいる土地を攻撃したいとは誰も思わない」と書いてあり、確かにそうだと思ったからです。

私は今回の広島派遣に「平和であることの尊さについて改めて考える」というテーマをもって参加しました。実際に参加してみて、原爆ドームや写真が物語る戦争の悲惨さ、人々の苦しみや悲しみを感じることができました。たった一つの原子爆弾が投下されたことにより、人々の生活が奪われてしまった。なんとなく想像できるけど、現地へ行って被爆者の方のお話を聞いたり、資料を見たりすることによってより、恐ろしいことなんだ、悲しいことなんだと実感できました。さらに、被爆者のお話を聞いた時には、やはり言葉の一つ一つに重みを感じました。

私が被爆者の山本定男さんのお話を聞いて印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、広島がなぜ標的に選ばれたのか、どのように原爆が落とされたのかです。まずなぜ広島が標的に選ばれたのかです。アメリカ軍は原爆をどこに落とすのかいくつかの候補を立て、そこからどんどん地域を絞っていきました。その過程の中にはなんと名古屋も候補に入っていたそうです。そしてどんどん候補が絞られていく中で、最終的に残ったのが広島、小倉、長崎でした。広島は原爆投下の流れはこうです。まずアメリカ軍はテニアン島を出発し、原子爆弾を落とす前に日本の様々な都市を空襲します。そして、被害が比較的少ない広島に原爆が落とされました。広島が最初に原爆を落とされた理由、それは広島の天気が他の都市と比べて良かったからです。それだけの事かと最初は思いましたが、社会の授業を思い返してみれば、戦時中天気予報はなかった時代であり、天気は重要なものだったのです。そのため最初に広島に原爆が落とされました。

二つ目は原爆が落とされた時の人々の様子です。これは私の予想とは全く違うものでした。わたしはB-29が飛んできたとき、きっとみんな怖がっていたんだろうなと思っていました。実際はB-29が飛んできたときみんなポカーンと空を見上げていたそうです。それはなぜかということ、空襲はふつう夜だからです。昼にたった一機でB-29が飛んでくるのが不思議だったそうです。そして、そのB-29から原子爆弾が落とされた時、3000～4000度の熱風にみんな吹き飛ばされてしまったそうです。原爆がおとされて空に広がったきのこ雲は白になったりピンクになったり、何とも言えない色をしていたそうです。その後火災がずっと続き、辺りはすべて焼け野原、あちこちに広がる死体、死体が焼かれ焦げたにおい、想像するだけでもまさに地獄絵図です。被爆者の山本さんの家族は幸いみんな無事だったそうですが、家はめっちゃくちゃで、親戚のお婆さんは爆心地の近くにいたため、亡くなられたそうです。一瞬にしてたくさんの方の命を奪った原子爆弾は本当に恐ろしいものだ改めて実感しました。次に、平和記念公園の見学で、公園にあるもの一つ一つに込められた思いもとても印象に残っています。その中でも特に平和の鐘に込められた思いが印象に残りました。平和の鐘には世界地図が書いてあるのですが、その世界地図には境界線がありません。それはなぜかということ「世界は元から一つ」ということを表しているからです。さらにそのまわりにある池のようなものには、川で亡くなられた方を慰霊するという思いが込められています。平和の鐘だけでなく、平和の灯や平和の池などにもそれぞれ深い意味が込められています。

私は改めて広島派遣で平和の尊さについて学びを深めることができました。また、それと同時に原子爆弾の恐ろしさも知ることができました。

今、世界中では戦争や紛争が各地で起きています。「私たちには関係ないこと」と思うのではなく、私たちは世界で唯一の被爆国として平和の大切さを伝えていかなければなりません。私が今回学んだことを家族だけでなく友人や親せきにも広めることが今私にできる世界平和を目指す第一歩と考えます。



私は今回の派遣を通じて、当初考えていたよりも多くのことを学ぶことができました。

その一つが、今まで「広島」と「原爆」に抱いていたイメージです。

私ははじめ、広島は原爆が落ちたかわいそうな都市、原爆は町を破壊し、多くの人を苦しめたものだというイメージしかもっていませんでした。そのため、初日、広島に着いた時、発展していた町の様子を見て、すごいなと思いました。自分が80年という長い期間を甘く見ていたことを実感しました。初日は、そのような広島という都市の魅力について知れる1日でした。訪れている人々もイキイキとして、観光を楽しんでおり、かつて悲惨な現場であったなんて信じられないと思いました。

2日目は、初日とはうってかわり「原爆」にフォーカスした内容でした。実際に原爆ドームを見物したり、ガイドさんの話を聞いたりしながら平和記念公園を散策する中で、過去の話と情景が現在とリンクされて、当時の原爆がどれだけ驚愕な代物だったのか、そしてそれを経験した人々が過去をのりこえたことがどれだけ大変だったのか、その先にある現在のこの時間がとてつもなく価値のあるものなのだと考えました。そのように散策を終えて、次に行ったのは、広島平和記念資料館でした。資料館では、現物品やその解説、原爆が投下されたときの状況を描いた絵画などが展示されていました。展示品は大半の物がボロボロになっており、絵画は、痛々しい傷を負い苦しんでいる人々が描かれており、切なくなったのを覚えています。そんな資料館の中で特に印象に残っているものがあります。1つ目は、原爆症による被害の資料です。そこには、原爆症により体が痛くなり、働くことができず、さらにその事情を知らない人たちに非難されたことなどが書いてありました。せっかく生き残ったのに一生後遺症に悩み続けることになるのはすごく不憫だし、本人も相当苦しんだと思います。ですが、それよりも当時の人々がそれを「非難した」という事実のほうが私にとってはショックでした。今となっては、ピンチのときは手を取り合おうという考えですが、特に戦争が終わった直後で全員、自分たちの生活を続けるので精一杯で他の人のことを考える余裕なんてなかったと思います。しかし、もう少し事情を知り、手助けできたならと思わずにはいられませんでした。2つ目は、資料館の見学が終わり、最後の廊下の一箇所においてあったノートです。そのノートは実際にここに訪れた人たちの感想や想いを書き連ねたものでした。パラパラとそのノートをめくって内容を見てみると、最初に目についたのはたくさんの英語でした。おそらく外国から訪れた人が書いたのでしょう。何を書いてあるかは分かりませんが、でも必死に思いを込めて書いたのは分かりました。私はこのノートを読むまで、原爆を意識しているのは日本の人々だけで外国の人々はあまり気にしていないと思っていました。ですが、そんなことはありませんでした。

最初に述べたとおり、私は今回の派遣を通して多くのことを学びました。それらのことをふまえて、私は平和な時代を続けていくためには過去を知り、教訓を見つけだそうとする態度をもつこと、そして視野を広げてみるのが大事だと考えます。今の私たちはなかなか過去を調べません。なぜなら現代のことで忙しいからです。しかし、それではいけません。過去を知れば少なくとも過ちを繰り返すことはないはずです。特に、原爆はもう落としてはいけません。そうやって個人の考えを深めたら、次は世界に目を向ける番です。人に話してみたり、人の考えを聞いてみたりしてみましょう。そうすることで相手にも考えるきっかけを与えられ、より平和の輪が広がると 생각합니다。私も自分の経験した内容をいろんな人に伝えていきたいです。まずは、「広島原爆について調べてみましょう!」と伝えていきたいです。

今の日本の平和は果たして真の平和といえるのか。私は、戦争についての悲惨な報道を見るたびにこのことを考えています。北朝鮮や中国の核兵器の脅威。日本各地に駐在しているアメリカ軍。戦争は決して遠い国の出来事とは言えないのではないのでしょうか。

実際、八十年前に落とされた原子爆弾の影響は今も残っており、私も心を痛めていました。しかし、テレビや書籍などをどんなに見ても、実際に現地で自分の目で感じてみないと分からないことがあります。さらに、戦争を知らない世代として、今、日本で幸せ・平和に生きていくことの意味を考えるべきと思いました。今回、みよし市中学生平和学習広島派遣団として選ばれ、広島で過去から学び、命の尊さについて学んできました。

まず、私たちは平和記念公園をまわりました。ガイドの方のお話によると、原爆ドームはもと広島県産業奨励館という名前で、広島県の特産品などを展示し、販売する場所だったそうです。しかし、被爆をしたことにより、建物の壁の一部が崩れ落ち、現在の形になりました。今も、原爆ドームの周りは鉄柵で囲まれており、崩れ落ちた壁が地面に落ちていて、爆風や放射線による被害がどれだけ大きかったのかということを物語っていました。しかし、原爆ドームは以前、取り壊されそうになったことがありました。原爆が投下された時の悲惨な光景を思い出させるからです。ですが、「原爆の悲惨さを後世に伝えるためにも残さなければならぬ」という意見になり、取り壊しはなくなりました。その際、平和の時計塔が建てられたそうです。この時計塔は毎日八時十五分にチャイムが鳴り、全世界へ「ノーモアヒロシマ」を訴えています。

また、平和記念公園には、「平和の灯」というモニュメントがあります。台座は、手首を合わせ、手のひらを大空にひろげた形を表現しており、水を求めてなくなっていった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和への願いを込めています。この灯は、昭和三十九年八月一日に点火されて以来、ずっと燃え続けており、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続ける」という核兵器廃絶の象徴となっています。このモニュメントの周囲にある石碑には、「安らかに眠ってください、過ちは繰返ませぬから」という碑文が刻まれています。この言葉は、生き残った人たちやその意志を繋いでいく人たちが責任をもって核兵器廃絶、戦争撲滅に力を尽くしていくという決意ではないかと読み取りました。

そして、今回の派遣で一番衝撃を受けた場所は広島平和記念資料館です。ここは被爆者の遺品や写真を展示しており、被爆した当時の状況を伝えています。熱線により大きく歪んだ鉄骨。あちこちが吹き飛ばされ、焼けた被爆者の服。あたり一面が焼け野原になった写真。そのどれもが実際に起きたことであり、思わず目を背けたくなるものばかりでした。しかし、これらは記録として残していくと同時に、記憶としても残す必要があると私は感じました。

この広島派遣の経験を通して、真の平和は核兵器の脅威がなくなって初めて実現するのだと気づきました。しかし、世界にはいまだ核兵器保有国があります。

今年は戦後八十年の節目となる年です。戦争経験者が減る中、直接話を聞く機会が少なくなり、危機感が持たれています。そこで、私たちができるのは被爆の実相を発信し続けることです。一人では微力ですが、無力ではありません。さらに、私たち一人一人が自分ごととして捉え、常に平和について考え続けることが大切です。世界で唯一、核兵器が使われた国である日本人として、率先して非核化を訴えていき、私が自分自身で感じてきたことを活かし、世界平和について伝え続けたいです。

